



今のうちに学べる事



沖縄県立中部病院呼吸器内科 喜舎場 朝雄

皆様、こんにちは。県立中部病院で勤務しております喜舎場です。研修病院で勤務している立場として研修医の先生方に望む事について自由に述べてみます。

新しい臨床研修システムがはじまり研修システムの標準化または独自性の埋没なども叫ばれているかと存じます。医師には臨床・教育・研究という三本柱があると思います。その中で市中の臨床教育病院に求められる役割として臨床と教育の充実があると思います。そこで初期研修に携わる若き研修医の皆さんには短期的および長期的な自らの目標を持って望んでほしいと考えます。

まず、臨床の面で中部病院では24時間365日オープン救命救急センターにてその人のやる気になれば1年目の先生で年間1,000人の患者を診る事が可能です。最初は小生も右も左もわからずに同期生、レジデントの先生、看護師さん、薬剤師さんなど多くの方々からアドバイス・支援を受けながら何とか人並みに診察また判断出来るようになりました。最初のうちは先輩や講義などからの耳学問や体で覚えていく事も重要だと思います。とにかく患者さんを多く診察し、また効率よく問診して問題を抽出しバイタルサインや理学所見の異常を的確に捉えアセスメントをたて重症度を判断するプロセスをきちんと学んでほしいと思います。救急室の段階では私は決して最終診断をつける事が目標でなく帰宅・経過観察・入院・ICU入室といった見極めをきちんと出来る事が重要だと考えております。また、当院の多くの指導医がいつも口酸っぱく言っているように1年目の先生が注

意深く観察すべき症例や重症例を長時間もちすぎない事だと思います。そして救急の場においても冷静さを失わず同僚を大事にし、また、患者の家族への言葉遣いにも配慮が必要です。我々医師のちょっとした言葉が家族をなごませ、それがないと逆に不安に陥れてしまいます。重要事項や大事な検査の説明は忙しい中、大変ですがきちんとする事を習慣づけましょう。

次に一般病棟での仕事ですが1年目の先生には問診とプレゼンテーションがきちんと出来るようになる事は医師として非常に基本的ですがとても大切です。医師は生涯にわたりプレゼンテーションをする機会があり若い頃に身に付いた事が一生をある程度決定づけると思います。そして平均2週間という短期間で多くのセッションをまわり慣れるのが大変ですが各科の基礎的な事項をきちんと学び、自分が十分に学べないと思ったらその点を重点的に上級医に質問したりする積極性が必要だと思います。

2年目のレジデントになると当院では各科で患者の担当医となり所謂病棟での主役になりました。所属チームのリーダー的な役割も担う事になります。そこでは担当する喜びと同時に付随する責任感、診断へのアプローチ、患者の全体像を捉えての管理、本人および家族への病状説明など多くの重要事項をこなしていく必要が求められます。ここでは身につけた知識とともに患者の背景、年齢等に応じた治療の応用などの柔軟性も必要です。患者の病態は教科書通りの手順を踏んでも必ずしもうまくいくとは限りません。ですから患者のメインの問題をきちんと把握しておく事は言うまでもありませ

ん。この時期に重要な事として私は医師としてのプロ意識、患者を担当する責任感、患者や家族と向き合う姿勢、コメディカルの方々との良好なコミュニケーション、タイムマネジメントなどを挙げたいと思います。

その次に後期専攻医に関してですが内科に関して申し上げると現在のプログラムの2年間で内科医としての基礎を仕上げるのは困難だと思います。入り口がやっと見え始める時期だと考えております。2年間で培った医師としての基礎をふまえて臨床の真の面白みがわかってくるのが3年目以降ではないかと感じております。ある程度の重症患者のケアも出来、日常に疑問に思った事を自ら調べてみて解決していく臨床の醍醐味も味わえてくるようになると思います。また、院内での経験もふまえて対外的な学会発表などにも積極的にのぞみ多くの先生方の意見や批評も受ける事も自らの成長には欠かせないものです。また、後期専攻医の件と関連した事で沖縄県ではコースにより離島診療所や離島の公的病院で自らの臨床的な総合力を遺憾なく発揮できる機会が出てきます。これは若い先生方にとってはなかなか得られないチャンスだと思

います。自分1人の力で判断管理をし良い帰結にもっていった暁には大きな自信が得られるものと思います。私自身は自治医科大学の卒業で卒後3年目で離島診療所に2度赴任する機会がありました。未熟ものでしたが臨床の現場で学んだ自信と診療の合間の勉学を併せて自分なりのプライマリ医療のベターなものは提供出来たかなと思います。また、離島で学んだ大きな財産として地域社会での連携、患者や家族との関わり、社会の縮図、保健師さん、役場の方々を含めた医療チームでの自らの役割などについて腰を据えて考え、習得する機会になった事です。

そして今、私が感じている事は離島で頑張った先生方の将来を如何にサポートするかについてです。自分で出来る事を当院や多くの共感する仲間とともに提供していきたいと思ひます。

最後にこれからあるいは現在、研修に勤しんでいるあるいは離島診療所や離島の公立病院で若き先生方には1日1日の経験が自らの将来の糧となりまた、先生方を暖かく見守る先輩が必ずいる事を忘れずに精進して行ってほしいと思ひます。

原稿募集!

「若手コーナー」(1,500字程度)の原稿を随時、募集いたします。開業願未記、今後の進路を決める先生方へのアドバイス等についてご寄稿下さい。



指導医に求めるもの



沖縄県立中部病院 津覇 実史

私のような若輩者が「指導医に求めるもの」、というタイトルで文章を綴ることは甚だ恐縮であるが、初期臨床研修の振り返りをかねて述べさせて頂きたい。

“島医者”を目前にして

いきなり、“島医者”？という言葉に少々驚かれたと思うが、少だけお付き合い願いたい。

私は高校生までを沖縄本島で過ごし、その後、僻地医療を担う医師の育成を基本理念に掲げる自治医科大学で医学を学んだ。卒業後沖縄に戻り現在勤務する県立中部病院に就職し、沖縄県の僻地である離島診療所において一人で診療を行えることを目標に、研修を積んできた。

幸運にも、これまでに大勢の優れた指導医に巡り会うことが出来た。医療の知識やスキルはもちろん、患者に話しかける時の表情や言葉の選び方、そして死生観に至るまで、医師としての人生を歩き始めたばかりの若造に、多くの種を植え付けて頂いた。

教育や指導ということが素晴らしいのは、自分が努力して得たものを、次の世代に絶えず受け継いでいけることだと思う。

指導医は、自分の知識や技術、人生観までも、目の前の研修医を通じて、その先に待つ患者に伝えられる資格があることに、まず、誇りを持って頂きたいと思う。

3年間の研修期間を終え、いよいよ来年度からは診療所勤務が始まる。

医療現場という荒波に対峙する基礎体力を与えて下さった指導医の先生方には感謝の気持ちでいっぱいである。

先生方から頂いたものすべてを、島の方々に還元したい。

前置きが長くなってしまった。それでは、私の考える「指導医に必要なもの」について述べていきたい。

叱るということ

初期臨床研修の必修化に伴い、近年、臨床研修をテーマにした書籍が爆発的に増えている。研修医用の本はもちろんのこと、最近では指導医のための「参考書」も数多く出版されている。その中で以前目にした「指導医の悩み」コーナーの、ある文章が気になった。

『40代 内科系指導医

「最近の研修医は、ちょっと厳しく指導すると、すぐに落ち込み、やる気が無くなるようだ。これでは叱るに叱れない。』

確かに、研修医の立場として上級医や指導医に怒られることは辛い。一生懸命やった結果であればなおさらである。しかし研修を行っていく中で、私たちは、怒ることの出来る指導医の方が圧倒的に少ないことに気づく。

もう退官されてしまったが、私の尊敬するある内科の指導医は、研修医を目の前にして、よく叱っていらっしやった。烈火の如く怒り、時にはモノが飛ぶこともあった。しかしその指導医が叱るとき、そこには明快な原則があった。

患者からの病歴聴取や身体所見が充分でなかったとき、 unnecessaryな検査をオーダーしたとき、患者の経過を隅々まで把握できていなかったとき・・・すなわち目の前の患者に対し、最善の配慮が出来なかったときであった。医者になりたての研修医に最善を尽くせなかったことを理由に叱るのは、酷な話かもしれない。しかし、「この患者が自分の家族だったらどうするんだっ!!」と、決して理不尽ではない、至極当然の理由でのお叱りであった。常に患者の立場で考えるこのスタンスを、いつまでも大事にしたい。

指導医が研修医を叱ることは大変なエネルギーを必要とすることは十分承知しているが、研修医の成長のために、そして何より患者のためにも、信念を持って、熱く、厳しく叱ってほしい。

win-winの関係でありたい

多くの研修指定病院では、初期研修医は各科を万遍なくローテーションし、より幅広い知識を身につけることが出来るようになった。この状況において、指導医には当該の科で一方的に知識、技術の伝達をするのではなく、研修医が他科で身につけた知識を吸収しようとする姿勢を常に持って頂けたらと思う。すべてを知っていることが良い指導医とは限らない。わからないことは研修医とともに悩み、ともに学び合っていて、日々成長する医師こそ理想の指導医である。教える中で何かを学ぶというギブ・アンド・テイクにより、win-winの関係でありたいと思う。

私のような駆け出し医師が、失礼を覚悟で、「指導医に求めること」について述べさせて頂いた。医学教育に真剣に取り組んでこられた、大勢の偉大な先生方のおかげで、いま、沖縄県は全国でも有数の研修医育成の場になっている。この大切なバトンを私たちの後輩にも繋いでいけるよう、成長していきたい。

原稿募集!

「ロゴマークは語る」コーナー

「病・医院のロゴマーク」の原稿を募集しています。
どうぞお気軽にご紹介下さい。